

[要旨]

ULOGOS

— 映像一般と人間の言語 —

武村 知子

これは要旨というより序文ないし後書である。提出したテキストは、筆者が一橋大学で継続的に出講している「映像文化論」講義において目下ベースとなっている映像原理論的考察のうち些少のトピックを文章化し、「脱文脈」を念頭に置きつつ若干詳細に加筆を施したものである。

とはいえ「脱文脈」とは何か、果たしてそれは第一に観察されるべきものなのかそれとも実践されるべきものなのか、その観察実践はいかように行うべきなのか、筆者は明瞭に把握するに至ったとは言いがたく、今なお、確かに依拠しようと思えるのは、当研究会主宰大杉氏によって当初述べられた、「地べたを這いずりまわるように」考えてみたいという貴重な言葉のみである。したがって、現在筆者が執筆提出しうるトピックのうち最も地べたを這いずりまわるに近い姿勢のものを選び、文章化にあたって可能な限りその方向を心がけた。第一章では前段階として「映像」の本質と定義について基盤的考察を行い、第二章ではそれに基づき、ヴァルター・ベンヤミンの論考「言語一般と人間の言語」の冒頭の詳細かつ望むらくは脱文脈的な読解を試みた。ただし、この読解に際してある理由から意図的に投入してある恣意性そのものは、べつだん脱文脈と関わりはなく、端的に、ベンヤミンのいう「言語の最も奥深い本質」としての「精神的内容の伝達を目指す原理」を映像とそれを見る者の間の関係性に適用して映像原論へと落とし込むことを可能にするためのものである。

本論において「映像」は、「映っている限りにおいて存在するもの」と定義され、存在論的に探究される。そしてそういう意味における映像とそれを見る者との間に生じる伝達を考えるにあたり、映像を「見る」行為は、見る者にとっての「入力」としてではなく「出力」として捉え直される。